

仏喜三郎

野村胡堂

—

「八、久しく顔を見せなかったな」

銭形の平次は縁側一パイの三文盆ほんさい栽を片付けて、子分の八五郎のために座を作ってやりながら、煙草盆を引寄せて、甲斐性のない粉煙草をせせるのでした。

「へエ、相済みません。ツイ忙しかったんで——」

「金儲けか、女出入か」

「からかつちやいけません」

「まさかあの案山かかし子に魔まが差したようなのに凝こっているんじゃないな」

「何んです、その案山子に魔がさしたてエのは」

「白つばくれちやいけない、踊だよ。水本賀奈女かなめとかいうのが、大変な評判じゃないか。お前の叔母さんの近所に住み着いて、二年ばかりの間に町内の若い男をすっかり気狂いにしてしまったという評判だぜ」

「へッ」

「変な声だな、すっかり言い当てられたろう。——悪い事は言わないから、あれだけは止す方が宜いぜ。縮緬ちりめんの手拭なんか持って歩くと、野郎はだんだん縁遠くなるばかりだ」

「それですよ、親分」

「何がそれなんだ。眼の色を変えて膝なんか乗り出しゃがって」
「その水本賀奈女師匠が、思案に余って銭形の親分さんをお願い

して、ちよつと伴つれて来てくれと——」

ガラツ八の八五郎は、急に居住いを直して、突き詰めた顔になるのです。

「御免蒙しょうむるよ、踊の師匠の用心棒は俺の柄にないことだ」

平次は自棄やけに煙管を叩くと、煙草の烟けむりを払い退けるように手を振るのでした。

「でも、水本賀奈女師匠が人に狙ねらわれているんですぜ。幾度も幾度も変なことがあったんで——、怖かなくて叶なわないから——」

「変なこともあるだろうよ。近頃は向柳原へ行くと、男たちは皆んな魔がさしたようにソワソワして居るっていうじゃないか」
平次はまるっ切り相手になりません。

「親分」

「もうたくさんだ、帰ってくれ。——水本賀奈女にそう言うが宜い、踊の師匠の看板かんばんを外して、紅白粉べにおしろいを洗い落し、疣尻いぼじりまき巻にして賃仕事でも始めて見るとな。世の中に怖いことがなくなるぜ」

ガラツ八はスゴスゴと帰って行きました。まさに一言もない姿勢です。

併しかし、事件はこれを切っかけに、大変な発展をしてしまいました。それから三日目の夕方——。

「さア、大変ッ、親分」

息せき切って飛込んだガラツ八。

「今日の大変は荒っぽいようだな、何が始まったんだ、八」

平次は相変らずおどろく様子もなく植木の芽めから眼そを外そらさうともしません。

「師匠が絞しめ殺されたんですぜ、親分」

ガラツ八は少し喰い付きそうです。

「水本賀奈女がかい？」

「だから言わないこっちゃない、あのとき親分が行って下されば」

「怒るな八、殺されたのは気の毒だが、岡っ引が十手を突っ張らかして、評判のよくない踊の師匠のところへ行けるか行けないか、考えて見ろ。一体どうしたんだ」

「可哀想ですよ、親分。——昼湯から帰って来て、大肌脱ぎになつて化粧して居るところをやられたんだ」

「誰も居なかったのか」

「内弟子のお秋は味噌漉しを下げて豆腐か何んか買いに出かけた留守。——曲者は表の格子を開けて入って、後ろから——、そのまま裏へ抜けた様子で」

ガラツ八の話は手真似が入ります。

「ともかく行って見よう」

平次は立ち上がりました。

二

「野郎ッ、来やがれッ」

「何をッ、お前こそ逃げるなッ」

「その手を離せ、畜生ッ」

「誰が離すものかッ」

絡み合い、唾み合い乍ら、旋風のように路地に入って来た二人の若い男、銭形平次が出かけようとする出会い頭、開けた格子の

中へ二匹の猛獣のように飛び込んだのです。

「あッ、何んという事をするんだ」

さすがにひるんだ銭形平次。

「親分、この野郎だ、師匠を殺したのは」

「何をッ、人殺しはこの野郎に間違いはねエ、あっしがこの眼で見ただから」

二人はまた齒を剥き出して、新しい争いを捲き直すのでした。

「半次に助七じゃないか、こいつは一体どうした事なんだ」

ガラッ八の八五郎は、二人の間へ割ってはいって、何うやらこ
うやら引離し、二頭の高麗犬のように平次の前に据えました。

「ね、八五郎親分。この半次の野郎が、師匠に振り飛ばされて、
うんと怨んでいたことは、親分も知つての通りだ」

と助七、

「何をッ、師匠を死ぬほど怨んでいたのはうぬじゃないか」

とやり返す半次。八五郎はようやくそれを宥めて、ともかくも
二人の言い分を尽させました。

そのこんがらかった二人の言葉を整理して聴くと、半次は——
ツイ先刻、賀奈女の家の木戸から庭へ廻って、何心なく声を掛け
ると、当の賀奈女は大肌脱になったまま、鏡台の前に倒れ、助七
が次の間——入口の三畳でまごまごしていたと言い、一方助七に
言わせると、師匠に用事があった、入口から声を掛けたが返事が
ない、心易立てに入つて次の間を覗くと、賀奈女は絞め殺されて、
縁側に半次がウロウロして居た——というのです。

それから騒ぎになって、折柄通りがかりの八五郎が飛込み、銭
形平次に報告されましたが、半次と助七は、日頃の鞆当筋で、こ

れを切っかけに憎悪が燃え上がり、『お前だ』、『いやうぬだ』、『何をッ』、『銭形の親分のところへ来いッ』と、もつれ合いながら、とうとう此処まで練り込んで来たと言うのです。

「よしよし、二人で相談してやったんでなきや、二人とも下手人じゃあるめえ。——少し落着いて話せ」

平次は漸よつやくいきり立つ二人を宥めました。二人で相談して賀奈女を殺し、二人で相談してこんな芝居を打つという微妙びみょうな細工は、半次や助七の智恵では出来そうもなく、それほど深い巧たくらみがないとすれば、お互に疑われた業腹さで、相手より強く強くとのしかかって争いつづけていたのでしょう。

半次は床屋の下剃したぞりで二十三、助七は質屋の手代で二十七、どちらも若くて無分別で、水本賀奈女の操あやつる妖あやしい糸のまにまに、平次のいわゆる魔のさした案山子かかしのように踊っていた仲間です。

「ところで、二人が表と裏から入って行くとき、誰にも逢わなかったのか」

平次は改あらためて問いました。

「逢やしませんよ。——だからこの野郎が殺したに違げえねエと

——」

半次がまくし立てると、

「逢ったのは、このひよつとこ野郎だけですよ、親分」

助七も敗まけては居ません。

「もう宜い、二人が喧嘩をしているうちに、本当の下手人は何んな細工をするか解らない——歩きながら聴くとしよう」

平次は半次と助七を引っ立てるように、薄暗くなりかけた街へ飛出し、向柳原へ急ぎながらつづけました。

「——二人は別として、水本賀奈女をうんと怨んでいた者が他に
あつた筈だ、心当りはないのか」

「そりゃ、たくさんありますよ」

「例えば？」

「師匠と一年でも半歳でもいっしょに暮した、伊勢屋新兵衛などは、良い身上を潰した上、女には棄てられ、女房には死なれ、日備取のようなことをしながらそれでも遠くへも行かず、賀奈女の阿魔が誰かに殺されるのが見たいと、恥を棄てて町内に嘯り付いていますよ。なアに、有りようは、他所ながら師匠の顔が見ていたいんで——」

助七はそんな事を言いながら、ニヤリニヤリと笑うのです。

三

向柳原の水本賀奈女の家というのは、町の懐ろの中へしまい込んだような深い路地の奥で、小体ながら裕福に暮していたらしく、磨き抜いた格子にも、一つ一つの調度にも、妙に艶めかしさと不健康な贅沢さとが匂います。

家は入口の三畳の外に、賀奈女が殺されていた居間の六畳、あとは踊舞台をおいた八畳と、納戸代りに使っている暗い三畳、それに台所だけ。灯りを一パイに点けて、ザワザワと人が集まっておりますが、あんなに喰い附いていた狼連は薄情にも顔を見せず、町内附合いで仕様事なしの老人たちが、型通りの仕度をととのえて検屍を待っているのです。

「おや、銭形の親分」

ほぐれる人の渦の中へ、平次は入って行きました。死体はまだそのまま、鏡台はハネ飛ばされて、座布団の上から引摺りおろした恰好に、賀奈女の死体は横たわっております。

骨細ですが、よく引緊った肥り肉、——いわゆる凝脂が真珠色に光って、二十五というにしては、処女のような美しい身体を持った女です。

首に巻いたものは、赤い扱帯でもあることか、無残な荒縄。「フーム」

銭形平次は死体の顔をひと眼、思わず唸りました。これが八丁荒しと言われた魅力の持主で、神田中の若い男を気狂いのようにしたとは思われない悪相です。

「本性が出たんだね、親分。——怖いものじゃありませんか」
八五郎は囁きます。

「お前も講中の一人だったじゃないか——こうなりや仏様だ、悪く言っちゃ済むめえ」

平次は有合せの浴衣を顔へ掛けてやって、神妙に双掌を合せるのでした。

「そう思って、先刻からふんだんに線香を上げてますよ」

無駄を言いながらも、二人は念入りに家の中を調べ、死体の位置と、出入口の関係を見、集まった人達の噂などを集めました。

「なくなった物は一つもなし、——家の中には少し泥が落ちていた——尤もこれはわざとやったのかも知れない。——縄も何処にでもある、三つ繰りの藁縄だ。——後ろから近寄るのに気が付かない筈はないから、知ってる者に違いあるまい。——多分振り向きもせずに、鏡の中でニッコリしたんだろう。そこを——」

銭形平次は残された事情の上に、見事な仮想を組み立てながら、犯罪の現場を再現して行くのです。

「親分、下手人の見当は？」

「待て待て、——路地の外は天下の往来だ、人通りはたくさんある。夕方路地に入った人間を一々覚えていてる人はあるまいから訊いても無駄だ。庭から裏へ抜けると路地を通って横町へバアと出る。左手は横田若狭様の堀か、五千五百石の御旗本だ。そこへ消える術はない。——まず表から入って、賀奈女を殺して、裏へ逃げたと見るのが本当らしいな。すぐその後へ半次と助七が裏表から来て鉢合せをした。——ところで内弟子のお秋を呼んでくれ、少し訊きたいことがある」

「へエ」

間もなく八五郎に引立てられて来たのは、十六七の踊の弟子というよりは、摘綿の弟子によくある型の、少し野暮ったい、そのくせ存分に気取った、頑丈な娘でした。

「お前か、お秋というのは？」

「ハ、ハイ」

「先刻あの騒ぎのあった時、どこに居たんだ」

「あの、豆腐を買いに出ました」

「その豆腐はどこにある」

「お勝手に置いてあります」

「よしよし持って来なくなつて宜い。——ところで、路地を入つたとき誰にも逢わなかつたのか」

「え」

「家に入ったとき、一番先に眼についたのは何んだ」

「半さんと助さんが、睨み合っていました。そして、気が付くとお師匠さんが——」

「泣かなくなつたって宜い」

シクシクと手放して泣き出すのを、平次は少し持て余し気味です。

「あの——」

「何んだ」

「殺したのは誰でしょう」

「そいつはわからないが、——お前には良い師匠だったのか」

「——」

お秋は黙り込んでしまいます。

「下手人を挙げるためには、いろいろ訊きたいことがある、正直に言ってくれるか」

「え」

「第一番に、師匠——賀奈女をうんと怨^{うら}んでいたのは誰だ」

「伊勢屋さんですよ。往来で私の顔を見ると、師匠はまだ生きて
いるか、——なんて言うんですもの」

「他には」

「さア」

「ここへ一番よく来たのは誰だ」

「半次さんと助七さんですよ。どんな日も一度ずつは来ました。

多い時は二度も三度も——」

「たいそう精が出るんだな」

平次はガラッ八を振り返ります。これもどうかしたら日参した口かもわかりません。

「へッ」

八五郎はその視線を避けるように首を縮めます。この小娘が何を言い出すか、危なくて危なくてたまらない様子でした。

四

近所の衆から一と通り訊きましたが、何んの手掛りもなく、路地を入った者も出たものも、半次、助七、お秋のほかには見たものもありません。

それに、死人に対する遠慮があったにしても、水本賀奈女の評判はまことにさんざんです。

「これだけ評判が悪いと、死に花ですね。——皆んなをこんなに喜ばせるんだから」

ガラツ八はまた飛んでもない事を言います。

「馬鹿野郎、何んという口をきくんだ」

「へエ」

ガラツ八の無遠慮な口をたしなめながら、その晩は引揚げる外はありません。

翌る日、朝の内に賀奈女の家へやって来た平次は、思いも寄らぬ事を発見しました。

「八、ここは路地の奥でどこからも見えまいと思ったら、横田若狭様邸内の火の見櫓から一と眼だね。——昨夜は暗くて気が付かなかったが——」

縁側に立った平次は、左手に近々と建っている、火の見櫓を見上げるのでした。

「賀奈女もそれを気にしていましたよ。でも、あの調子だから、火の見櫓から見下ろされるのを承知で大肌脱おおはだぬぎか何んかで化粧していたんでしよう」

とガラッ八。

「横田様の火の番をお前知ってるか」

「喜三郎というのが居ますよ。伊勢屋の死んだ女房の親爺おやじで、仏喜三郎と言われる好い人間で」

「行って会って見ようよ」

平次はそこから直ぐ、横田若狭の邸内——板塀とすれすれに建てた火の見の下にやって行きました。賀奈女の部屋から二十間とは離れて居ません。

八五郎に声を掛けさせると、気さくに、

「ほい、何んか用事かい」

そう言って裏木戸から顔を出したのは、五十七八の馬面うまつらの老人、大して賢そうではありませんが、その代りこの上もなく人は好きそうです。

「お前は喜三郎というんだね、あつしは、平次だが——」

「へエ、よく存じて居ります。銭形の親分で」

「さつそくだが、きのう隣の踊の師匠のところ騒ぎがあったんだが——」

「そうですね、実はあつしも少し引っかかりがあつて、あの師匠を怨んでいましたが、天罰てんばつと言っちゃ済まないが、——恐ろしいことですね」

「引っ掛りという」と

「なアに、大したことじゃありません。伊勢屋の死んだ女房が、

私の娘で、へエ——」

「そうか」

平次も相手の正直さに、反かえって話の腰を折られた形です。

「ところで、御用と仰しやるのは？」

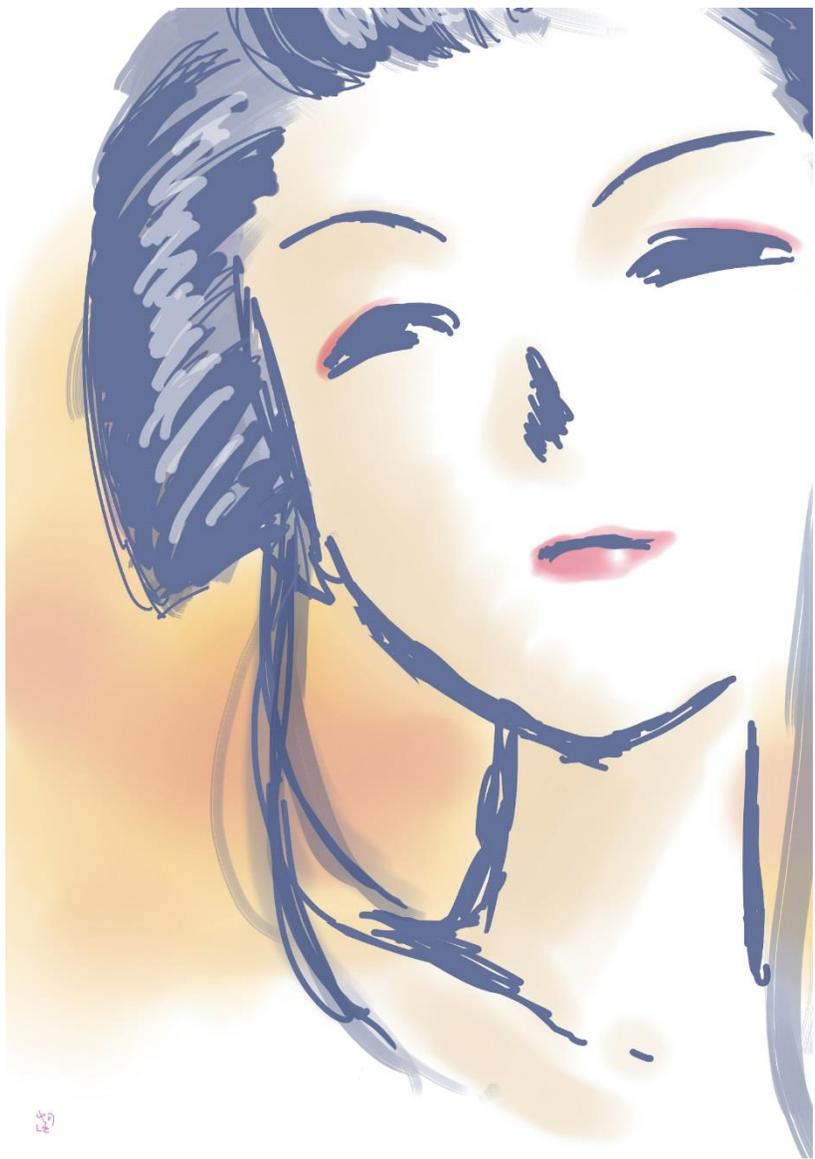
喜三郎はわたかま蟠りのない長い顔を挙げます。

「火の見からはよく見えるだろうと思うが、昨日何んか変わったことがなかったのか」

「いろいろ見えましたよ。私はこんなかぎよう稼業をしている位ですから、年にしちや眼の良いのが自慢で、師匠が毎日昼湯へ入って来て、大肌脱で化粧する図には当てられつづけて居りますが——」

「昨日は」

「相変らず鏡の中の自分の容貌きりように見とれながらせつせと磨みがいていましたよ。そのうち、表から誰か来た様子で、師匠は坐ったま



まニツコリして、声を掛けると、男の人が入って来ましたよ——あの愛嬌は大したものです。その先をよく見ていると私の手柄になるんですが、障子を半分締めているので、何が何やら解りません。しばらく私も眼を外そらして、違った方角を眺めて、ヒョイと眼を返すと、頬冠ほおかむりをした中年の男が座敷から庭へ飛び降りて、追っかけられるように裏の方へ駆けて行くじゃありませんか」

「その顔を見なかったのか」

平次は少しじれ込みます。

「色の黒い、背の高い頑丈な男で」

「身なりは？」

「茶がかつた万筋まんすじの古い袷あじのようでしたが」

「それっ切りか」

「その男が見えなくなると、半次さんと助七さんが裏表から入って、いきなり唾いがみ合いを始めましたよ。あれは大笑いで、ヘッヘッ」

喜三郎の笑いは歪ゆがみます。

五

「色が黒くて、背が高くて、頑丈で、茶がかつた万筋の古袷を着ているのは誰だえ」

平次は家へ入って来ると、近所の衆に訊きました。

「そいつは伊勢屋さんじゃありませんか。——師匠といっしよに暮した伊勢屋新兵衛そっくりですよ」

「その伊勢屋は今どうして居るだろう」

「家は近所ですが、二三日見えませんよ」

口はたいてい揃います。

さつそく八五郎を出してやって、心当りを隈なく捜させましたが、伊勢屋親兵衛はどこへ行ったか、日が暮れるまでとうとう見付かりません。

この伊勢屋新兵衛というのは、曾ては向柳原の大きな雑穀問屋で、三四代つづいた老舗しにせでしたが、主人の新兵衛がお今という女房があるのに、水本賀奈女かなめに夢中になり、一年ばかりいっしょに住んでいっているうちに、数千両の身代を費い果した上、賀奈女には小気味よく捨てられて、スゴスゴと自分の家へ帰った時は、女房のお今は重なる苦勞に打ちひしがれ、もう起つことも出来ない重態だったのです。

その後まもなくお今は死にました。事情が事情だったので自殺だという噂も立ちましたが、事實はひどい懊惱おうのうと貧苦のために、癆症ろうしょうが重くなり『帰った夫』を迎えて、もう一度以前の平和な生活を楽しむことも出来なかったのです。

その日も何んの発展もなく暮れて、平次が引揚げの支度をして
いる時、

「親分、伊勢屋新兵衛が来て、入口で威張いばってますよ」

近所の衆が苦々しく取次いでくれます。

「構わないから、ここへ通そう」

「大丈夫ですか、少し酔ってるようですから、仏様の前で何を言
い出すか、わかりませんよ」

「言わせるのも功德だろうよ」

ガラッ八は心得て行くと、まもなく三十二三の色の黒い頑丈な男を連れて来ました。——高い背、よれよれの茶万筋の袷——。

「あ、銭形の親分」

伊勢屋新兵衛の顔には、一瞬躊躇しゅんちゆうちよの色が浮びましたが、思い定めた様子で棺かんの側に近づくと、しばらく物も言わずに突っ立っておりまして。やがてどっかと膝を突くと、線香をひと掴み、ムラムラと立ち昇る煙の中にガツクリ首を垂れました。

念仏一つ称とえるでも、拝むでもありませんが、中年男の眼からは、大粒の涙がボロボロとこぼれます。

「見る言わないこっちゃない——」

新兵衛の唇からは、罵倒ばとうというよりは、泣言とも愚痴ぐちともつかぬ言葉が突いて出ました。

「——俺があれほど言ったじゃないか。——私がいなきや、生きていられないという男が、町内だけでも十人はあるとお前は言ったが、——見るが宜い、お前が死ねば、一人も顔を出しやしない、皆んなこの先呑気に生きて行ける証拠だ。——俺はな、この伊勢屋新兵衛はな、お前がこんな姿になるのを、この眼で見たいばかりに、家も身上しんしようも失なくしてしまつた町内に、恥を忍んで踏み止つていたんだぞ。——馬鹿なツ」

伊勢屋新兵衛は吐き出すように言い終つて、線香をもうひと掴み燻くゆらし、さて平次の方を振り返つてピョコリとお辞儀をするのです。

「伊勢屋、お前は泣いてるじゃないか、やはり悲しいのか」
平次はそれを迎えて言います。

「悲しい？ 冗談でしょう、馬鹿馬鹿しくつて、可笑しくつて、涙が出ますよ」

「そうかなア」

「私はね、親分。この女のために、町内一番の身上しんしようをいけなくして、こんなざまになりました。皆んな私の不心得から出たことで、身上なんざ、どうなったって構やしません、私一人が恥さえ忍べば、また稼いで溜める工夫もあります。唯ただね、親分、——」

伊勢屋新兵衛はガツクリ頭を下げると、またも黒く瘦せた頬を、涙がハラハラと洗うのです。

「私の道楽を苦に病んで、死んでしまった女房が可哀想でなりません」

「親分、私は、金や身上なんざどうなったって構やしません。女房さえ達者で生きていてくれたら、死んだ気になってまた稼ぎ溜め、元の伊勢屋の半分でも三分の一でも拵こさえて、あの——馬面の見つともない女房——その癖仏様のように気の良い女房に、安心をさせてやりたかった——、それが口惜しくて泣くんですぜ、親分」

「女の中にも賀奈女のような、自分の容貌と才智と愛嬌うぬほに自惚れ切って、世間の男を夢中にさせ、それが嬉しくてたまらない様なのもあれば、——見つともなくて、無口で無愛嬌で、自分の亭主へ意見一つ言うことも出来ず、そのくせ仏様見たいな素直な心持で、黙って死んで行くお今のような女もあります」

「賀奈女のために死んだ男や女は二人や三人じゃねえ。内弟子のお秋いいなすけさんの許嫁いいなすけだって、やっぱりその一人——」

「何？ お秋の許嫁がどうした」

平次は聞きとがめました。

「そんな噂もありますよ。町内の衆だって、賀奈女の容貌と愛嬌と踊には感心しながら、腹の中じゃ化け狐ばぎつねだと思っっている。——死んだって泣く者なんか一人もねえ、ザマア見やがれ」

「——」

「私は賀奈女の死んだのさえこの眼で見れば、もう思いおくことはない。死んだ気になって働いて、もういちど伊勢屋の身上を建て直し、あの世の女房に見せてやりますよ。——女房はそればかり言いつづけて死にました。私はこうなっても誰も怨みはしない。お前さんさえ元のお前さんになってくれれば、ただ私たちの代になって伊勢屋を潰つぶしたとあっては、あの世へ行っても御先祖様に合せる顔はない。お願いだから、死んだ気になって働いて、元の身上の半分でも拵つづえて下さい——って」

「——」

「私は坊主になった気で働きますよ、——賀奈女にもいよいよこれで縁切りだ。心の隅に残った未練みれんも、さっぱりとなくなっちゃいました。それじゃ親分」

帰って行く伊勢屋新兵衛、ガラッ八がいくら眼顔で知らせても、平次は縛ろうとも呼び戻そうともしません。

六

「お秋は？ 親分」

「あの女じゃない、許嫁がどうしたか知らないが、——あの女で

はあるまいよ」

「師匠を殺しておいて、豆腐を買いに出たんじゃありませんか、その後へ半次と助七が来たとしたら」

八五郎もなかなかうまいところを考えます。

「あの女には、荒縄で賀奈女は殺せない。賀奈女の方が力も才智もある。——それに、師匠を殺して、豆腐を買って来る胆力たんりよくはあるまい。——豆腐はちゃんと買って来ている。——本当に殺す気なら、まだ外に折があった筈だし、もう少し騒ぎ立てるわけだ」

「そんなものですかね」

「それより、庭へ喜三郎が来ているじゃないか、——外へ出て話を聴こう——。八、お前もいつしよに来るが宜い」

平次は草履ぞうりを突っかけて、大急ぎで庭へ出ました。生暖かい春の宵、朧おぼろながら屋並の上には月も出ております。

ポクポクと影を引く老人の後に跟ついて、平次と八五郎は河岸ッ端まで歩きました。

「親分さん、よく気が付きましたね」

「それは稼業だもの」

迎えるように立止って淋しく笑う喜三郎、平次はその影の前の捨石に腰をおろしました。

「私はけさ飛んだことを申上げてしまいました。——賀奈女を殺した者を見たなんて、あれは皆んな嘘うそでございますよ」

「——」

「私はあのととき火の見櫓やぐらから降りていました。何んにも見たわけじゃございません」

喜三郎老人の話は飛んでもないものでしたが、それを聴く平次

は、別におどろく様子もありません。

「そうだろう、お前の言うことはあんまり明瞭過ぎたよ。いくら眼がよくたって、火の見の上から鏡の中の賀奈女の顔がニッコリ笑ったのが見える筈もないし、頬冠りの男の顔の色まで判る筈はない」

「私は伊勢屋が憎かったのでございます。あんな良い娘を悶え死にさせた婿の新兵衛が憎くてたまらなかつたのでございます」

「お前は伊勢屋を賀奈女殺しの罪に陥したら死んだ娘のお今が歎くだろうと気が付かなかつたのか。——お前の娘ながら、伊勢屋の女房は貞女だった」

平次の調子は低いが身に沁みます。

「面目次第もございません。親分さん、私は先刻、庭に立って伊勢屋の話聴いてしまいました。見下げ果てた男だと思つた婿の伊勢屋新兵衛が、私などよりは余っぽど良い男と判つて、私は穴へでも入りたい心持でございました。一たんの過ちから、賀奈女などに溺れたのは、悪いには違いありませんが、死ぬほどの目に逢いながらそれを許してやった娘も立派なら、今となつて娘の貞女に思い当り、死んだ気で働こうという伊勢屋も立派な男でございませす。それに比べると、私は、私は——」

「あ、待った」

言う間もありませんでした。駱駝のような感じの喜三郎老人は、思いのほか敏捷に立ち上がると、平次と八五郎が留める間もなく、身を翻してざんぶと川の中へ——。

「八、飛込め」

朧月の影を砕いて浮きつ沈みつする喜三郎。

「駄目だ、あつしは御存じの徳利で」

「仕様のない奴だ、泳ぎ位は稽古しておけ」

クルクルと裸になった銭形平次は、場所を見定めて同じ春の水へパツと飛込んだのです。

×

×

それから十日二十日と日が経ちますが、踊の師匠水本賀奈女を殺した下手人はとうとう拳がらず、平次は神田ツ子と八丁堀の役人からさんざん小言を言われながら、尻をあげようともしません。

「親分、賀奈女殺しはどうしたんです？」

「解ってるじゃないか」

八五郎の鼻のキナ臭いのを、平次は面白そうに見ているのでした。

「ちつとも解りませんよ。下手人は誰でしょう」

「西国巡礼に行ったよ。——お前も餞別せんべつを一朱奮はずんだじゃないか」

「えっ、あの火の番の喜三郎？」

「野暮な声を出すなよ。聴いてるのは幸いお静だけだが——」

「本当ですか、親分。どうして縛らなかつたんで」

「一度水へ飛込んで亡者になったじゃないか」

「へエ——」

「誰にも言うな。——尤ももつと西国三十三カ所の霊場を廻まわって、どこで死ぬか判らないから、二度と江戸には帰らないと言っていたが」

「呆れたね、あれが下手人で、へエ——」

「何を感じするんだ。あの親爺は娘の敵を討つ気だったのさ。婿むこの伊勢屋をあんなににして、娘を殺したのは、賀奈女の仕業と思ひ込んでいたんだ。その化狐の賀奈女が、毎日ぬけぬけと昼湯へ

入って、年寄の喜三郎を馬鹿にしたように、眼の前で大肌脱になつて化粧しているんだ。この女のために、何人の男が身上を潰し、何人の女が命を捨てたかも知れない。この先もまだまだあの様子では罪を作るだろう。そう思うとたまらなかつたんだろう。火の見櫓から降り、木戸を開けて庭に入つて行くと、賀奈女は相手の気も知らずに、ニッコリして愛嬌を振り撒いたんだろう、そう言った女だ。木戸の外には荒縄がうんとある。後ろ向になつて合せ鏡をするとところを、喜三郎はムラムラとなつて飛込んで殺してしまつたんだろう」

「へエ——」

八五郎は胆を潰してばかり居ります。

「現場を見極めた証人（目撃者）だと思つたから、俺も最初は少しも疑わなかつた。が、伊勢屋が憎くて言つた忖え事に、おやと思つた」

「——」

「あととは知つての通りさ。——意見を言うわけじゃないが、容貌と愛嬌と才智だけで何んでもやり遂げようと思つた女には氣をつけるよ。ハツハツハツ、まアそう言つたようなわけさ。恐ろしく突き詰めた顔をするじゃないか、八」

平次はそう言つてカラカラと笑うのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十八年四月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第七卷 河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行 錢形倶楽部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>